

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名：伊藤智ゆき (いとう ちゆき)

論文『朝鮮漢字音研究』は、中期朝鮮語(15～16世紀)の漢字音について、当時の文献を綿密に調査することにより、その体系と中国語の中古音などとの対応を明らかにし、それに基づいてその母胎となった中国語の方言がどの時代のものであるかについて独自の見解を打ち出したものである。

この分野では、従来、河野六郎博士による『朝鮮漢字音の研究』(1964-1967)がきわめて有名であり、朝鮮語のみならず中国語音韻史の研究者などにとっても必読の文献になっていたが、伊藤氏の論文はそれに比べて次のような点において大きな進展が見られる。

- (1) 河野博士の研究で扱われていた資料は16世紀後半から18世紀に至る比較的新しい時代のもが多く、また、その種類も韻書など規範的な文献が多かったのに対して、伊藤氏の論文はそれより古い15世紀末から16世紀末の文献を中心としている。
- (2) それらの文献1つ1つについて、異なる版がある場合はそれらもすべて含め、また、可能な限り原典に直接当たりつつ、丹念に文献学的考察を行なって、それらの資料的価値を明確にしている。
- (3) 河野博士の研究では、中国語の中古音および唐代長安音との比較が中心になっているのに対し、伊藤氏の研究では、それに加えて、ベトナム漢字音、日本漢字音、蔵漢対音、中国各地の方言音なども考慮に入れられており、それによって朝鮮漢字音の母胎に関する議論がより精密になっている。
- (4) 河野博士の研究ではあまり扱われていなかった、声調に関する詳細な議論がなされ、かつ、それと声母、韻母が組み合わされて、個々の字音についてより総合的な検討が行なわれている。

このようにして多くの検討を経た上で伊藤氏の出した主な結論は次の通りである。(1) 朝鮮漢字音は河野博士の考えていたような、慧林音義に反映されている唐代長安音よりは若干新しい唐末の長安音に基づくものであるということ、(2) 河野博士が時代の異なるいくつかの層が重なったものと解釈していたのに対して、比較的均質な体系をなす、ということである。

これらの結論や、その背景をなす考え方については、例えば、単なる借用語とは異なる「字音」の性質という点や、「層別」に関するより深い議論が必要ではないかとの意見も出されたが、伊藤氏が、河野博士の論点に対して反論している個々の事例は説得力の大きいものが多く、全体としてこの研究がきわめて優れたものである点はゆるぎないものであり、この分野に対する非常に大きな貢献であるというのが本委員会の結論である。また本論文の附録資料である漢字音の対応表は朝鮮語のみならず中国語やアジア各地の漢字音研究者にとって極めて有意義なものであり、この論文の一日も早い公刊がまたれるというのが審査委員の一致した意見であった。また伊藤氏が朝鮮語を扱いながらも中国語音韻史に関する深い理解と正確な知識を有する点は称賛に値するとの意見が審査委員会の中の中国語の専門家から寄せられた。以上のことから、本論文は博士(文学)論文として十分な評価に値すると判断する。